

第 101 回関西実験動物研究会
動物を熟視して考える

2. 欺き・協力・優しさ・ねたみ——フサオマキザルの社会的知性——

藤田和生（京都大学文学研究科）

新世界ザルの 1 種であるフサオマキザル (*Cebus apella*) は、ニホンザルよりもふた回りほど小さなサルである。ヒトにつながる系統からはおよそ 3500~4000 万年前に分岐したと考えられている。ニホンザルとよく似た集団を作り、主として果実や虫・小動物を食べて生活している。彼らは、飼育下のみならず、野生状態でも複雑な道具使用をすることが知られており、南米のチンパンジーと呼ばれることもある。その器用な手を用いて、肢体不自由者のヘルパーとしても活躍している。

この講演では、京都大学文学研究科でおこなわれてきた飼育下フサオマキザルの社会的知性に関する研究を紹介する。社会的知性とは、社会的環境、つまり他個体との関わり合いにおいて発揮される知性のことであり、他者の心を読むはたらきは、その最も高度な側面である。社会的知性は、高度な知性は社会的な問題を解決するための適応として進化した、とする社会的知性仮説のもとで、近年注目されている。

社会的知性には競合的な側面と協力的な側面がある。競合的な側面は、他者を欺いたり操ったりして、自身の利益を計ることである。手始めに、フサオマキザルが自発的にそうした欺き行動をとるかどうかを分析した。サルどうしを対面させ、間に 2 つの餌箱を置き、劣位個体が餌の入った方の箱を開けると優位個体がそれを強奪できる場面を作ると、劣位個体の中には、空の箱を先に開けるといふ、欺きと解釈可能な行動を取る個体が現れた。他方、協力的場面として、餌を手に入れるために必要な一連の作業を 2 頭のサルが分業して協力し合えるかを調べたところ、サルは自発的に協力を始めた。この協力は、いちどきには一方のサルにしか餌がわたらないようにしても、役割を交代すると持続した。つまりサルは、将来の利益を見越して、相互的利他行動をとることができた。

こうした複雑で柔軟で戦術的な行動の調整に、他者の心を読む働きはどれほど関与しているのだろうか。それを検討するために、こうした行動を読心という側面から可能にするさまざまな要素的な能力を調べた。その結果、フサオマキザルは他者の注意の状態を認識できること、直接観察していない他者の行為の結果を推理できること、他者の失敗に学んで自身の行動を修正できること、他者の行動の観察から他者の知識の状態を認識することができることなどがわかった。また他者の感情を認識して自身の行動を調整できること、食物分配場面では、自分の取り分は変わらなくても他者の取り分を気にかけ、時には相手を思いやるかと思えば、場合によっては嫌がらせをするなど、柔軟に行動を変えることもわかった。

これらはまだまだ読心と呼ぶには遠いかも知れない。しかし、ヒトから遠く離れた霊長類にも、他者の多様な心的状態を認識する能力が分有されていることは疑うことができない。サルの心はこれまで考えられていた以上に奥深い。読心の進化的起源は思いのほか古いのかも知れない。